



A TREASURY OF WORLD LITERATURE

セルバンテス

ドン・キホーテ

会田 由訳

中央公論社

世界の文学 2

©1965

---

セルバンテス

訳者 会 田 由

昭和40年11月10日初版発行

昭和44年10月5日10版発行

---

発行者 山 越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社  
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社  
口絵印刷 東京プロセス株式会社  
本文用紙 三菱製紙株式会社  
クロス 日本クロス工業株式会社  
製函 加藤製函印刷株式会社  
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地  
電話(561)5921(代)振替東京34

目次

ドン・キホーテ

解説  
年譜

486 499

3



ドン・キホーテ

原題 才智あふるる郷士ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ



## 前篇

### 第一章

名にし負う郷士ドン・キホーテ・デ・  
ラ・マンチャの為人および日常について。

名は思い出したいくないが、ラ・マンチャのさる村に、さほど前のことでもない、槍かけに槍、古びた櫛、痩せ馬に、足早の猟犬をそなえた、型のごとき一人の郷士が住んでいた。昼は羊肉よりも牛肉を余分に使った煮込み、たいがい晩は昼の残り肉に玉ねぎを刻みこんだからしあえ、土曜日には塩豚の卵あえ、金曜日には扁豆、日曜になると小鳩の一皿ぐらいは添えて、これで収入の四分の三が費えた。その残りは、厚ラシャの服、祭日用のビロードのズボン、同じ布の靴履いに使い、ふだんの日は黒っぽいペリヨリ織で体面をととのえた。家には四十歳に近い家政婦と、まだ二十歳にならぬ姪と、それによせ馬に鞍もつけられ、剪定用の鉋もふるう、畑仕事や市

場への買物に行く若者がいた。われらの郷士の齡はまさに五十歳になんたとしていた。顔もからだも痩せひからびてはいても、骨組みのがつりした男で、恐ろしく早起きの、大の狩り好きだった、なんでも通称をキハーダもしくはケサーダと呼んだという者もいるが、この点に關しては、それについて書いている著者のあいだで多少の異論がある、もつとも信憑するに足る臆説によると、ケハーナと呼んだともいう。しかし、これはわれわれの物語にはさして重要ではない。彼に關する物語の中で、ほんの少しでも真実からそれさえしなければ十分だからである。

ところでご存じねがいたいことは、上に述べたこの郷士が、いつも暇さえあれば（もつとも一年のうちの大部分が暇な時間であつたが）、たいへんな熱中ぶりでむさぼるごとく騎士道物語を読みふけたあまり、狩猟の楽しみも、はては畑仕事の指図さえことごとく忘れ去ってしまった。しまいにその道の好奇心と氣違い沙汰がこうじて、読みたい騎士道物語を買うために幾アネーガという畑地を売り払ってしまった。こうやって、手に入るかぎりのそういう書物をことごとく己が家に持ち込んできたのであるが、あらゆるこの種の本の中で、あの名高いフェリシヤノ・デ・シルバの作つたものほど彼の嗜好に投じた作品は一つもなかった。なぜならその文章の

明快な点と、あの独特のこんがらかった叙述が、彼にはまるで珠玉とも思われたからであつて、なかでもどこを開いても『わがことわりに報い給う、ことわりなきことわりにわがことわりの力も絶えて、君が美しさをなげきかこつてもまたことわりなり』などと書いてある、ああいう恋の口説や決闘状を読むに及んでいっそうその感を深くしたからである。それにまた、『星辰<sup>せいしん</sup>をもて君が神性をいとも神々しく力づけ、君をしてその高貴にふさわしきふさわしさに、まさにふさわしき人ともなし給ういとも高きみ空……』などというところを読んだときにはなおさらであつた。

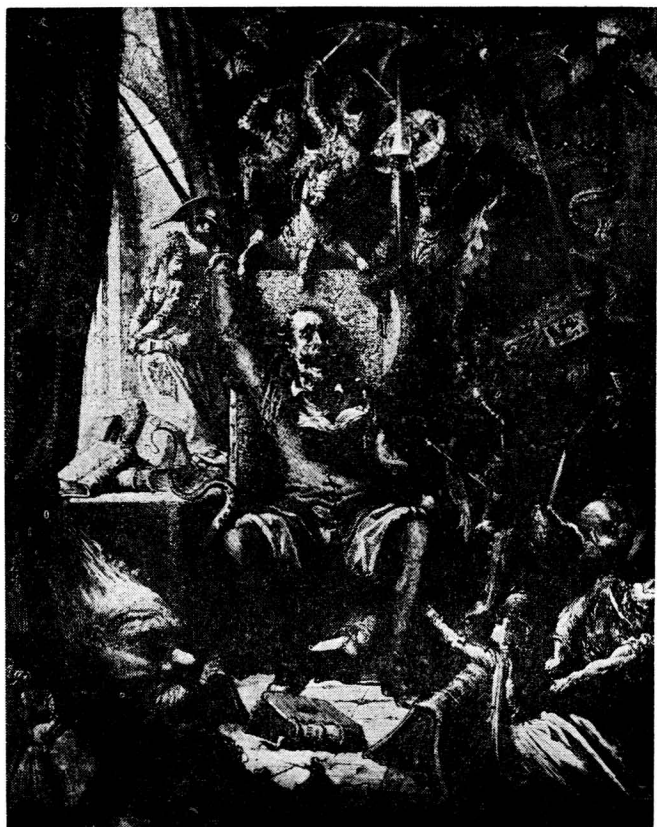
こういうたいへんな叙述のおかげで、哀れにもこの騎士は正氣を失つて、これを理解し、その意味を底の底まで突きつめようと夜の目も寝ずにつとめたのであるが、こればかりはよしんばアリストテレスがそのためばかりによみがえつてきたところで、しよせん意味を引き出すことも理解することもできなかったにちがいない。

彼は村の住職と、（これはなかなかの物識りで、シグエンサ<sup>③</sup>で学位をとつた男であつたが）、バルメリン・デ・インガラテルラ<sup>④</sup>とアマディース・デ・ガウラのいづれが立派な騎士であつたかということで、しじゅう議論を戦わせた。しかし同じ土地の床屋のニコラス親方は、どちらも日輪<sup>にっりん</sup>の騎士<sup>きし</sup>には及びもつかぬ、万が一これに比

肩しうる者があつたとしたら、アマディース・デ・ガウラの弟の、ドン・ガラオールぐらいのものだ、なぜかといへば、彼は何が起ころうとびくともせぬ精神の持主だ。それに彼は乙に氣取つた騎士でもなければ、兄貴のように泣き虫でもない、それでいて武勇にかけてはいささかも兄貴にひけは取らないという意見であつた。

要するに、彼はすっかりこの種の読物にこつたあげく、夜はまだ明るいうちから白々と明けはなれるまで、昼は昼でまだ暗いうちからとつぷりと暮れはてるまで、ひたすら読書三昧<sup>さんまい</sup>にふけた。こんな具合に、ろくに眠りもせず、無性に読みふけたばかりに、頭脳がすっかりひからびてしまひ、はては正氣を失うようなことになつた。数々の妖術<sup>ようじゆつ</sup>だとか、争鬭、合戦、決闘、手負い、求愛、恋愛、煩悶<sup>はんもん</sup>だとか、その他さまざまの荒唐無稽な出来事など、すべておびただしい本の中で読んだ、一切の幻想が彼のうちに満ちあふれ、そうしてああいう彼の読んだ雲をつかむような作り事の一切のからくりはことごとく真実で、彼にとつては世の中でこれより確かな話はないと思われたほど、彼の空想の主座を占めたのだつた。

まったくの話が、思慮分別をとろの昔失つてしまつて、これまで世の氣違ひの誰一人として思ひつきもしなかつたやうな、およそ奇怪至極な考えにおちいるやうなことになつたのであるが、それはみずから遍歴の騎士となつ



て、甲冑かこうに身をよそおい、馬に打ち乗り、あらゆる冒險

を求めて世界じゅうを遍歴し、遍歴の騎士の慣ないとして、かねがね読み覺えたあらゆることをみずから實際に行なつて、こうしてありとあらゆる非行を正し、かつは数々の危険と窮地に身を挺して、見事これらを克服したあかつきには、名声をとこしえに竹帛しやくに垂るることにもなるということが、己が名誉をいやすすにも、国につくすのにも時宜じぎを得た肝要なことと思われたのである。この氣の毒な男は、もうすでに自分の腕の力で、少なくともトラピソンド帝国の帝位に登ったような氣になっていた。かくて、こういう楽しい空想を抱き、その中で感得する不思議な喜悅にせき立てられて、ひたすら自分の望むところを実行に移すことを急いだ。

そうしてまず最初に彼の行なつたことは、すっかり錆び朽ちて黴かびにおおわれたまま、何百年ものあいだ片隅にうちすて忘れられていた、何代も昔の先祖の古鎧ふるよろいを掃除することだった。これをできるだけきれいに掃除したり、つくろったりしたが、見るとこれに大きな疵きずのあることに氣がついた。ちゃんとした面頬めんぱつきの兜かぶとではなく、ただの鉄帽子だったことである。しかしこの疵は自分の手細工で補いをつけた。というのは厚紙でどうにか面頬らしいものをこしらえたが、これを鉄帽子に取りつけると、どうやらちゃんとした面頬つきの兜らしい格好になった

からだだった。じつは、それが丈夫で、切先の危険に十分耐えうるかどうかを試そうと、自分の劍を抜いてふた太刀浴びせたが、最初のひと太刀でたちまちにして一週間の努力の結果を水泡に帰せしめた。こんな具合に、あつけなく粉々にこわしてみると、さすがにありがたくなかつたので、こういう危険をさけるために、もうこれなら大丈夫とみずから満足のゆくまで、内側に鉄の筋金をあてがって、もう一度細工にとりかかったが、今度はもう一度試す氣はさすがになかつたので、そのまま採用して、みずからしごく申し分のない面頬つきの兜だということにした。

その次に瘦せ馬を検分に行つたが、これは一レアルをくずした小錢よりたくさんの蹄裂フットスれがあつて、おまけに *tantum pelles et ossa fuit* (皮と骨のみなりき) という例のゴネーラの馬よりもひどい欠点だらけではあつたけれど、彼の目にはアレクサンドロス大帝のブケフェルスも、エル・シードのバビエカもてんで足もとにも寄りつけないと思われた。これになんと名づけようかと思ひふけて四日間が空しく過ぎた。それというのも(彼の考へによれば)、これほどあつばれな騎士の馬で、のみならず馬そのものもこれほどの逸物いちぶつで、何かめざましい名前を持つていないなどということは不合理だったからである。そこで、これが遍歴の騎士の乗り料となる前

にどういう馬だったか、あわせて現在の身分もはっきり現わすような名前をつけてやろうと心をくだいた。なぜなら主人公の身分が変わるにつれて、馬も名前を変え、あまつさえこれから勤める新たな身分と新たな任務にふさわしい立派な由々しげな名をつけるということは、しごく道理にかなったことだったからである。こうして自分の記憶や空想の中でこしらえたり、消したり、へらしめたり、つけ足したり、こわしたり、それからまた作り直したりした、たくさんの名前の中で、最後に『さきの瘦せ馬』と呼ぼうと思いついたが、これは彼の見るところでは、気高く、口調もよく、しかも現在の身分になる前に駄馬<sup>ダマ</sup>だった身の上を現わしたばかりか、世のあらゆる駄馬の中でまず筆頭だということを、こよなく現わした名前だった。

こんな自分の好みにびったりした名前を馬につけてみると、今度は自分自身にも名前をつけたくなって、その思いにふけているうちに、さらに一週間を過ごしたが、ついにみずから『ドン・キホーテ』と名乗ることになった。この点から、さきにも述べたとおり、この実録の多くの作者たちは、彼の名は疑問の余地なくキハーダだったに相違ない、他の連中が言いたがるようにケサーダと呼ぶはずはないという論拠をつかんだのである。が、剛勇アマデイスが自分のことを味も素っ気もなくアマデ

イスと名乗るだけでは満足しないばかりか、祖国の名を高めようと、己が王国と生国の名をつけ加えて、みずからアマデイス・デ・ガウラと名乗ったことを追想して、これにならって自分もひとかどの騎士らしく、己が姓に生国の名をつけ加え、ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャと名乗ろうと思ったが、彼の考えに従えば、これで自分の素姓<sup>ソセウ</sup>なり生国をはっきりと表明し、かつは生国から異名をつけて、大いに生国の名を高めたつもりだったのである。

かくて鎧の掃除もすみ、鉄兜も面つき兜となり、瘦せ馬に名もつければ、己れの改名もすんでみると、今はただ愛を捧げる貴婦人を探す以外には不足な点はないということに気づいた。なぜかといえば、およそ恋愛のない遍歴騎士などというものは、葉や果実のない樹木か魂のない五体にも等しいものだったからである。彼はこんなことをわれとわが胸に言ったものだった。『もしもわが罪の報いがか、ただしは武運に恵まれて、遍歴の騎士には常<sup>トコ</sup>にありがちのとおり、そこいらで巨人にめぐりあつて、ただ一度の合戦で相手を倒すなり、胴中をまっ二つに切りつけるか、それともとどのつまり相手に打ち勝ち屈服させた場合に、そいつを贈物として献<sup>けん</sup>すべき相手を持つているのも結構なことではあるまいか、しかも当の巨人が伺候<sup>しやうゐ</sup>して、わがいとしき佳人の前にひざまずき、

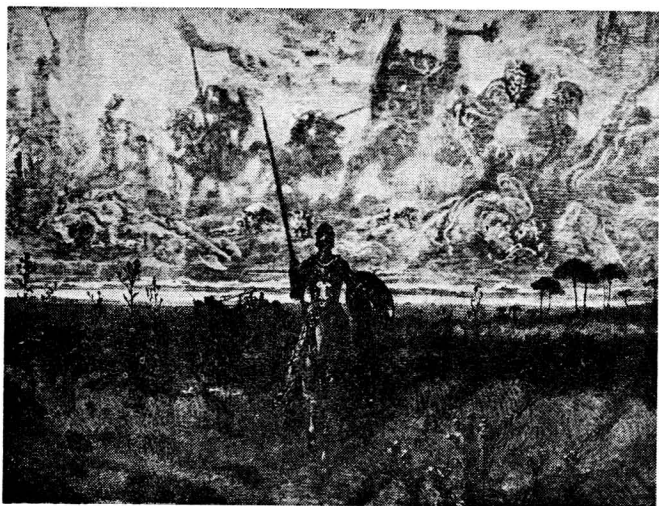
うやうやしくかしこまった声音で、《奥さま、拙者ことは、マリンドラニア島の君主、巨人カラクリアンプロと申し、いかに称えても称えがたい遍歴の騎士ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャによってただ一度の戦いで打ち負かされた者にござりますが、拙者めをあなたさまの存分になされますようにと、あのお方はあなたさまのおんにまかり出るようお願いつけなされたのでござります》と言うとしたら？』それにしても、われらが好人物の騎士はこの台詞を述べ終わったとき、いやそれにもまして己が思い姫の名を冠すべき相手を思い浮かべたときには、いかばかり喜んだことであらう！ なんでも世人の信ずるところによると、彼の村に近いさる村に、いともみえうるわしい百姓娘があつたが、ひとところ彼はこの娘に恋をしたことがあつた。といつても世間の取り沙汰では、当の娘はそんなことは知りもしなければ、ついぞ思つてみたこともなかつたというのであるが。その娘はアルドンサ・ロレンソという名前であつたが、彼の考えではこの娘に己が思い姫の尊称を与えたいと思つたのである。そこで自分にさして不釣合いでもなく、しかもともすれば姫君や上臈のお名にもまごうような名前をあれこれと探したあげく、ついにドゥルシネア・デル・トボーソと呼ぶことになつたが、これは娘がエル・トボーソの生まれだつたからである。

この名前はさきに己れみずからをはじめ、己が持物につけた一切の名前と同じように、彼としては音楽的で、変わつていて、しかも含蓄の深い名前であつた。

## 第二章

才知あふるるドン・キホーテが故郷を出で立つた最初の門出について。

さて、こういう用意万端がととのつてみると、彼が毀とうと思ふ不条理、正すべき不正、改むべき非理、除くべき弊害、果たさせねばならぬ負債が山積しているのであつてみれば、己が躊躇によつて世の中に損失をこうむらせているのだという考えにせき立てられて、彼はもはやこれ以上己が計画を実行にうつすことを待とうとは考えなかつた。そこで、自分のもくろみを誰にも打ち明けず、何人にも見られないで、ある朝、まだ夜の明けないうちに、それは七月の暑いさなかの一日であつたが、一切の武装に身を固め、ロシナンテに打ちまたがり、出来そこないの兜をいただき、手楯を把り槍をかいこんで、己が私心なき希望の第一歩をいかにやすやすと踏み出したかをかえりみて、こよなき満足に得々として、裏庭の小さくぐりから野原へと出て行つた。しかし野原にはいる



かはいらないうちに、たちまち彼はある恐ろしい考えに襲われたのであるが、これはもう少しのことで、このせっかくとりかかった企てを放擲<sup>ほうてき</sup>させたかもしれない底の考えだった。それというのも、彼は正式に叙任された騎士ではない、したがって騎士道の掟<sup>きまり</sup>に従えば、いかなる騎士に対しても武器を取って戦うことはできないし、戦ってはならぬ。のみならず、よしんば叙任された騎士だったにしても、やはり新参騎士として、己が武勇によって獲得するまでは、楯の面になんの意匠もない、白具足をまとわなければならないということが記憶に浮かんたのである。こういう考えは、少なからず彼の意図を動揺せしめた。しかし何をいうにも彼の氣違い沙汰は他のいかなる道理より旺盛<sup>ちやうせき</sup>だったから、彼をこんな状態にしまった数々の書物の中で、かつてみずから読んだところに従って、他の大勢の連中の行なった先例を真似て、最初に出会わした男によって正式に騎士にしてもらうことにした。一方、白具足については暇のあり次第せいぜいみがき立てて、白貂<sup>しろぎ</sup>にもまして白くしようと考えた。これですっかり落ちついて、馬の欲する道のはかとはどる気もなく、ここにこそあらゆる冒険の真骨頂があるとみずから信じながら、ひたすら旅路をつづけたのであった。

彼が最初に遭遇した冒険はラピセ狭間<sup>はざま</sup>のそれだと言う

作者連もあれば、なかには風車の冒険だと言う連中もあるが、しかしわたしがこの点について調査したところ、ラ・マンチャ県の年代記の中に記してあるのを発見したところでは、結局のところ彼はその日一日歩きつづけ、そして日暮れには瘦せ馬も主人公もすっかり疲れきって、ひもじさで死にそうになっていたのである。そこで、もしや休ませてくれる、目下の窮乏をなんとかしのぐことのできそうな、お城なり羊飼の牧舎なり見当たらないものかと、ほうほうを見わたしていると、ふと彼のいる道からほど遠からぬところに、一軒の旅籠（ペン）が見えたが、これは単なる軒端（のき）どころか、彼を救ってくれる宮殿へ導く星でも見つけたように感ぜられたのである。そこで彼は道を急いで、ちょうど日暮れ時にその旅籠に着いた。

このとき戸口には二人の若い女が立っていたが、これはいわゆる白首（しろくび）と言われる連中で、その晩たまたまこの旅籠に泊まり合わせた、幾人かの馬方連（うまはたら）といっしょに、セビリヤへ行く途中だった。ところでわが冒険家には、厄介なことに、思うこと、見ること、ないしは空想することが、どれもこれもすべてかつてものの本で読んだとおりにできているし、そのとおりになるものだと思っていたのだから、この旅籠を一目見るやいなや、四面の天守閣に銀色燦然（さんぜん）たる尖塔、それに跳ね橋も深い濠（ほり）もちゃんと備わり、その他一般にこういう城を描く場合のあ

いう一切の付属物を備えた、一個の城だと思われたのである。彼はこの城と見えた旅籠へ近づいて行った。そうしてそれからわずかに隔たったところでロシナンテの手綱を控えて、城に騎士のやって来るのをらっぱか何かで合図しようと、今にも銃眼のあいだに侏儒（こびと）などが現われはしないかと待ちうけた。しかしそれもなかなか手間どる様子だったし、それにロシナンテがしきりに厩（うまや）に行こうと急ぐので、彼は旅籠の戸口へ近づいて行った。そしてちょうどそこにぼんやりとたたずんでいた二人の若い女を見たのだが、これが彼の目には城門のほとりに遊ぶ二人のあでやかな姫君とも、たおやかな上臈（じやう）とも見えた。

ちょうどこのとき、はからずも一人の豚（いの）追いが切株の残った畑地を一群の豚を（とい）うのが、遠慮なくいえばこう呼ばれているからだ（が）、これを集めながら通りがかって、豚を呼びよせるのに使う角笛（つのふえ）を吹き鳴らした。するとこれがたちまちドン・キホーテには、侏儒（こびと）か何かが自分の到着の合図をしているのだという、予期したとおりのことに思われたものだから、すっかり得意になって旅籠とそれに例の貴婦人方（きふじんかた）のところへ近づいて行ったが、女連のほうではこんな具合に甲冑（かこう）に身を固め、手槍や楯（たて）もののしい風体の男のやって来るのを見て、すっかりおびえて旅籠の中へ今にも引つ込もうとした。しかしドン・キホーテは女たちの逃げるのを見て早くも彼女

たちの恐れを察し、厚紙細工の目庇をかかへて、ひからびた埃まみれの顔をあらわしながら、物腰やさしく、落ちついた声音で呼びかけた。

「あいや方々お逃げ召さるな。いささかの危害のご懸念にも及び申さん。なぜと申すに、およそ何人に対しても危害を及ぼすごときは、拙者の奉ずる騎士道の掟にはないこととござる。ましてご両所のお姿でもわかるとおりの、やんごとなき姫君方に対してはなおさらのこと」と

娘たちはあらためて相手を見つめた。そうして不細工きわまる目庇にかくれた相手の顔を探そうと眼をこらした。しかし自分たちの生業とはおよそ縁遠い、姫君方などと呼ばれるのを耳にしたものだから、思わず噴き出さないではいられなかった。しかしそれがあまりにも無遠慮だったので、さすがのドン・キホーテも思わず赤面して言葉をついだ。

「美しい人々にはしとやかと申すことが似つかわしいものでござるが、わけてもさしたる理由もなく、大声で笑うほど愚の尤なるものもござるまい。と申しても拙者は何も方々に気まずいいやな思いをおさせしようと思つてこんなことを申すのでは毛頭ない。拙者にはひたすら方にお仕え申す以外に他意はござらぬて」

この娘らにとってなんのことやらわからぬ言葉づかい

と、われらが騎士の奇妙な風体とが、いつそう女どもの哄笑をあおりたてると同時に、相手の怒りをあおりたてた。したがってちょうどこのとき、太った男だけあつて、いたつて争いごとのきらいな旅籠の主が出て来なかったとしたら、どんな事態にたちいたつたか保証のかぎりではないが、亭主も面繫、槍、円楯、胸当てというようなちぐはぐな物の具に身を固めた、このぶざまな風体を目にすると、いま少しのことで女連といっしょになつて、おかしさをそのままぶちまけるところであつた。しかしなんといつても、こういうものものしい武装のほどに恐れをなして、下手に出るにかぎると考え、こんな具合に持ちかけた。

「お侍さま、もしや旦那さまがお宿をお探してでもござりますなら、まあお寝台は別といたしまして（と申すのがあいにく手前どもには一台もござりませんのでな）、その他ならなんなりといかほどもそろっているつもりでござります」

ドン・キホーテはこの城塞の城主のへりくだった態度を見ると、それというのも亭主も旅籠も彼の目にはそう映つたからであるが、こう答えた。

「城主殿、拙者にはなんでも結構でござる、なぜと申すに、『物の具こそはわが暗着、わが休らいは戦さなれ』というわけでござるからな」

すると亭主は、相手が城主と呼んだのは、自分をカ

ステイリヤの野暮助だと思つたからにちがいないと早  
合点をしたが、そのじつ彼はアンダルシアのしかもサ  
ンルカルの浜辺そだちの男で、しかもカクスはだしの泥  
棒で、学生あがりの小姓も及ばぬ悪党だったから、すぐ  
さまこう答えた。

「そういうわけなら、『旦那の褥は堅き岩、君が熟寝は  
宿直なれ』つてやつでございましょうな。そういうお方  
なら馬からお降りなさいまし。なあに一夜どころか一年  
じゆうでも、この荒屋なら寝ないでおいでなざる機会は  
いくらでも請け合つてござりますて」

こう言いながら亭主は、ドン・キホーテのために鎧を  
支えに進み寄つたが、当のドン・キホーテはいかにも目  
がな一日断食の戒を破らなかつた男らしく、ひどく苦勞  
して辛うじて馬から降りた。

するとさつそく亭主にむかつて、自分の馬はおよそ世  
の中で穀類を食う生物の中でも飛びきりの逸物なんだか  
ら、できるだけ大切に扱つてくれるようにと申し入れた。  
そこで宿の亭主はいまさら馬に目をとどめたが、これは  
どう見てもドン・キホーテの言葉どころか、その半分も  
逸物とは思えなかつた。で、亭主は馬を厩に連れて行つ  
て、お客の用命を承ろうと引き返してみると、もうすつ  
かりお客と仲直りをした例の娘たちが鎧を脱ぐ手伝いを

しているところであつた。胸当てと背当ては脱がせたも  
のの、喉輪はずすことも例のできそこないの兜を脱が  
せることも、女たちにはできないばかりか見当もつかな  
かつた。これは有り合わせの緑色の打ち紐でしばりつけ  
てあつたが、何しろ結び目が解けないので、切つてしま  
うよりほかに方法がなかつた。しかしそれはどうあつて  
も本人が承知しないので、とどのつまりその晩は一晚じ  
ゆう兜をかぶつたままであつたのであるが、これはおよそ  
想像しうる中でも滑稽きわまる珍妙な姿だつた。こうや  
つて甲冑を脱がせてもらいながら、この脱がせてくれる  
すれっからしの女どもを、この城の貴婦人か上臈だと思  
いこんだので、ひどく氣取つて女たちに言葉をかけた。

「古里より出で来し時の

ドン・キホーテにいやまして、  
貴女らにかしずかれたる

騎士はこの世によもあらじ、

おとめらは彼をとりもち

姫どちは駄馬に仕えつ。

いや、それともロシナンテに、ですか。これはお二  
方、つまり拙者の馬の名前でござして、ドン・キホー  
テ・デ・ラ・マンチャは拙者の名前でござるよ。じつは  
つくした数々の武勲によつておのずと顯われるまではお